

入選

『おばあちゃんのおうち』

堀江あづさ

おばあちゃんの家からは、海が見えた。

お母さんが生まれたころに建てられたというその家は、白い壁と赤い屋根の二階建てで、グリム童話に出てくるおうちみたいだった。小さな庭がついていて、桜と梅の木が植えられていた。桜の木はお母さんが生まれたとき、梅の木はお母さんの妹のりつ子おばさんが生まれたときに植えたものだった。

りつ子おばさんの下に男の子が生まれるとわかったとき、おじいちゃんはゆずの木を植えるつもりだったらしい。でも植木屋さんに、「このあたりは寒いがら、ゆずはうまく育たないべ」と言われてあきらめたそう。お母さんの弟でわたしのおじさんになるはずだった男の子は、生まれてすぐに死んでしまった。

おじいちゃんは、お酒を飲むと北島三郎の『与作』をアカペラで歌うような人だった。でも、時々、「俺がゆずなんて植えようとしながら、息子が死んじゃったんだあ」と悲しそうにつぶやいた。

お母さんが炭焼き職人のお父さんと結婚したので、わたしは森の中の家で育った。かやぶき屋根とこげ茶色の柱と土色の壁でできていて、日本むかし話に出てきそうな家だった。

生まれ育った家に愛着はある。けれど、できることならおばあちゃんのおうちみたいな家で暮らしたかった。少しでもおばあちゃんのおうちに近づけたくて、玄関の外に画びょうと糊で白い模造紙を張りつけたことがある。遠目から見るとその部分だけは洒落ていて、童話のヒロインになれたような気がした。でもその晩、雨が降って模造紙はぐちゃぐちゃになりひどく叱られた。

森の中のわたしの家からおばあちゃんのおうちまで、車でほんの二十分ほどだった。夏休みや春休みには何日も泊まりに行った。おじいちゃんが海の事故で亡くなってからは、土日に泊まってそのまま高校に行くこともあった。

桜の季節が終わると桜の葉を塩漬けにして、前の年に漬けた葉を使ってさくら餅を作る。初夏になると梅の実をとって、半分は梅酒と梅シロップに、半分は梅干しにする。梅の実をもいだり、運んだり、乾いたふきんで拭いたり。おばあちゃんの手伝いをするのは楽しかった。

梅の実を拾ったり、庭のお花を摘んだりするときにおばあちゃんを見ると、にこにこ笑

いながらうちの壁を眺めていることがあった。

「なっちゃん、ちょっとこっちさ来てみらい」

おばあちゃんに手招きされ、ふたり並んで壁を見る。遠くからは真っ白に見えるけれど、近くで見るとクリーム色で、ところどころがベージュ色に汚れている。壁一面にフリーハンドで描いたような半円のような曲線が並んでいて、まるで波間のようなようだった。

「おじいさんが塗ったのは、たしかここいらだったかねえ」

おばあちゃんは玄関の隣の壁をそっと撫でた。おじいちゃんは漁師だったけれど、この家を建てる時にはたびたび仕事を休んで大工さんや左官屋さんの手伝いをしていたそう。おじいちゃんが亡くなってから、おばあちゃんは猫を飼いはじめた。トラコと名づけられたその猫はキジトラのメスで、おとなしくて賢い子だった。

夕暮れになるとふたりと一匹で散歩をした。

家の前の小道を右手に降り、砂利道を進んでいくと浜辺に出る。オレンジ色の夕日に照らされた海面は、波がうねるたびに金色に見えた。打ち寄せる波音を聴きながら海を眺めるうちにいつしか暗闇が忍びよる。

「おばあちゃん、なに考えてんの？」

身じろぎもせずに海を眺めるおばあちゃんにそう尋ねてみたことがある。

「おじいさんさね、今日も元気に過ごせましたって報告してんのっさ」

「昨日も、おとといも？」

「そう」

「明日もあさっても？」

「うん」

正直なところ、10代だったわたしには、おばあちゃんの日課は退屈なものにしか思えなかった。

35歳までに結婚できなかつたら、田舎に戻っておばあちゃんの家で暮らそう。密かにそう計画していたというのに、運よく物好きな今の夫と出会い、35歳の年に結婚した。夫を連れて何度かおばあちゃんの家に行った。おばあちゃんの腰はだいぶ曲がっていたけれど、気持ちはいつもシャンとしていた。

「東京で働くのに疲れたら、ふたりでおばあちゃん家に住まわせてもらお？」という私の言葉は本心だったし、「それもいいね」という夫の答えにも嘘はなかったと思う。

春になったら庭の桜でお花見をして、初夏になったら梅の実を漬けて、夏になったら海

水浴に出かけて、秋と冬は熱いコーヒーをポットに入れて海辺を散歩する。漠然としつつも具体的な私たち夫婦の未来とおばあちゃんとおばあちゃんのおうちは、あの日、大きな地震と津波に飲み込まれてしまった。おばあちゃんは庭も一緒におうちを丸ごと持って行った。白い壁には波のような曲線が描かれているのだから、あのおうちは海のなかをさぞかし上手に泳いでおじいちゃんのもとにたどり着けたに違いない。

あの日からもう7年が過ぎた。夫に家を買わないかと言われ、住宅展示場や建築会社の説明会に足を運ぶようになった。形とか間取りとか材質とか、家に関する知識を少しずつ学ぼうちにモルタル外壁という言葉を知った。見本写真で見た波のような曲線は、おばあちゃんのおうちの壁と同じだった。意識的に思い出さないようにしていたおばあちゃんのおうちの光景がむくむくとよみがえってくる。

赤い屋根に白い壁、庭には桜と梅の木があるおうち。

今なら、どうしてあんなにおばあちゃんのおうちが好きだったのかがわかる。家にも庭木にも空間にも、おじいちゃんとおばあちゃんの精いっぱい愛情が込められていた。だから私は安心して心を解放することができたのだ。

住宅展示場の帰り道、公園で猫を拾った。キジトラのメスで、見た目も性格もトラコにそっくりだった。そらこと名づけたその猫は、子どもがいないわたしたちにとってかけがえのない存在となった。ふたりと一匹で心地よく暮らせる家を、私たちはこれから作っていく。